

高知県における子ども食堂の実態と今日的課題に関する基礎的研究 With / After COVID-19 に向けた論点整理を交えて

近畿大学総合社会学部総合社会学科 講師 野田 満

Noda Mitsuru

研究の要旨

本研究は高知県内の子ども食堂を対象に実態把握を行い、子ども食堂の今後の推進及び支援に向けた今日的課題について考察を行うものである。具体的には、COVID-19感染拡大期以前（～2020.02）における子ども食堂の運営実態、及びそれ以降（2020.02～）のCOVID-19による影響の有無や程度、今後の意向を明らかにしながら、今後の子ども食堂を考える上での4つの論点：子ども食堂の①拡張と原点回帰、②適切な公的支援の在り方、③多様な連携・共生のかたち、④子ども以外も含む当事者の立ち位置、を導いた。

1. 序論：研究の背景と目的

6人に1人といわれる子どもの貧困、及びそれに伴う経済格差、社会格差が問題視されて久しい。こうした中で、無料或いは低価格で子どもに食事を提供する「子ども食堂」が各地で発足、運営されている。子ども食堂は食事の提供以外にも、多世代が集うコミュニケーションや目配りの場として等、多様な役割が期待されるものであり^{注1)}、地域社会のセーフティネットとしての重要性が高まっている。

他方で2019年より発生した新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の世界的流行は、現在もなお地域社会において多大な影響を及ぼしている。子ども食堂にあっても、COVID-19による影響の有無や程度、具体的課題の把握を踏まえ、「After COVID-19」に向けた方針を検討していくことは喫緊の課題であるといえよう。

以上を踏まえ本稿は、高知県内の子ども食堂を対象に実態把握を行い、After COVID-19に向けた考察を試みるものである。具体的には、表1に示すアンケート調査に基づき、子ども食堂の運営実態を1) Before COVID-19（以下、Before期）（2・3章）、2) With COVID-19（以下、With期）（4章）についてそれぞれ整理した上で、3) After COVID-19に向けた今日的課題を明らかにすること（5章）を研究の目的とする^{注2)}。

表1 アンケート調査概要

アンケート調査 (1st)		アンケート調査 (2nd)	
調査方法	郵送配布・返信用封筒にて回収	調査方法	郵送配布・返信用封筒にて回収
調査期間	2021年6～7月	調査期間	2022年1月
設問項目	COVID-19 禍以前の 1) 運営する子ども食堂の概要 2) 食材の使用頻度と調達方法 3) 献立を考える際の方針 4) 各スタッフの役割 5) 広報の方法 6) 他主体との連携状況等	設問項目	COVID-19 下における 1) 子ども食堂への悪影響 2) 子ども食堂の運営状況 3) After COVID-19に向けた展望等
回収率	77.9% (53/68部)	回収率	76.5% (52/68部)

2. Before 期における子ども食堂の運営実態

2-1. 子ども食堂の規模

はじめに子ども食堂のスタッフ数をみると、過半数が6～10名の規模であった（図1）。併せていち開催あたりの参加者数は過半数で50名以下であったが、参加者数の規模を問わず子どもの割合が50%未満のものが一定数存在しており、保護者を含む多世代の集うコミュニティの場として子ども食堂が機能していることが窺える（図2）。参加費は多くの子ども食堂で子ども無料、保護者含む大人は有料となっている（図3）。

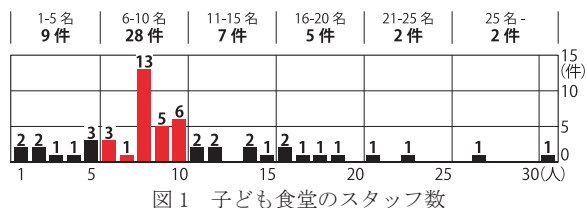


図1 子ども食堂のスタッフ数

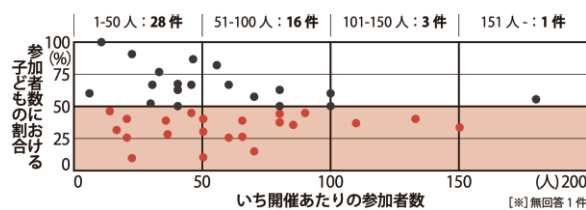


図2 子ども食堂の参加者数

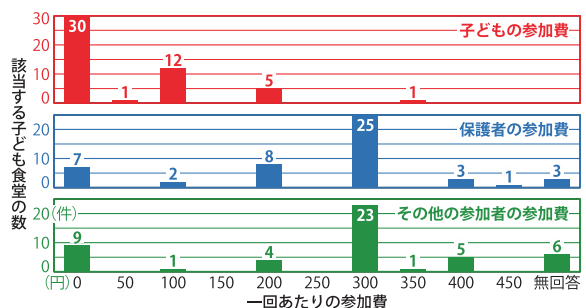


図3 子ども食堂の参加費

2-2. 子ども食堂の開催頻度と日時

子ども食堂の開催頻度については、過半数が

月 1 回の開催である。曜日は水・木と土・日に集中しており、概ねの傾向として前者は毎週開催、後者は隔週開催の向きがみられた。また不定期開催については、主として長期休み（夏休み、冬休み等）における開催が挙げられている（図 4）。

開催日時についてみると、平日開催は夕食の時間、土日開催は昼食の時間が中心であるが、後述する食事以外のアクティビティの時間として、いずれの曜日においても殆どの子ども食堂で 3 時間以上が確保されている（図 5）。

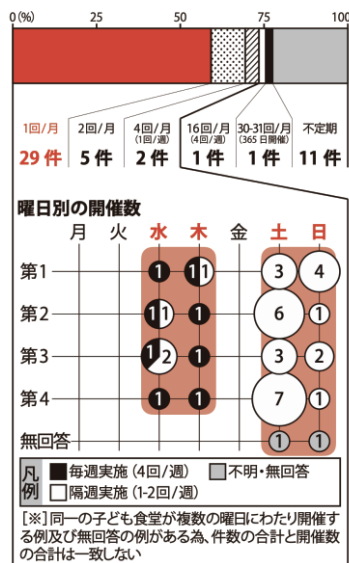


図 4 子ども食堂の開催日と頻度

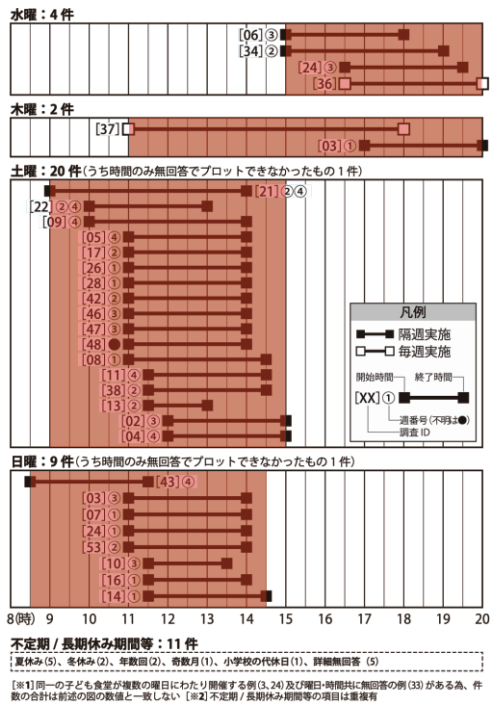


図 5 子ども食堂の開催時間

2-3. 子ども食堂の開催場所と求める条件

子ども食堂の開催場所は「公民館または集会所」が多い一方「その他」の内容も様々である。場所を検討する際の条件（図 6）は「調理場や器具が充実している」が最も重視されており、次いで「みんなが知っている」「広い」「施設使用料が安い」と続くが、「その他」も多様であり、「安全である」ことや駐車場関連の条件、子どもの行動範囲、地域コミュニティの中心といった立地要件も挙げられている。

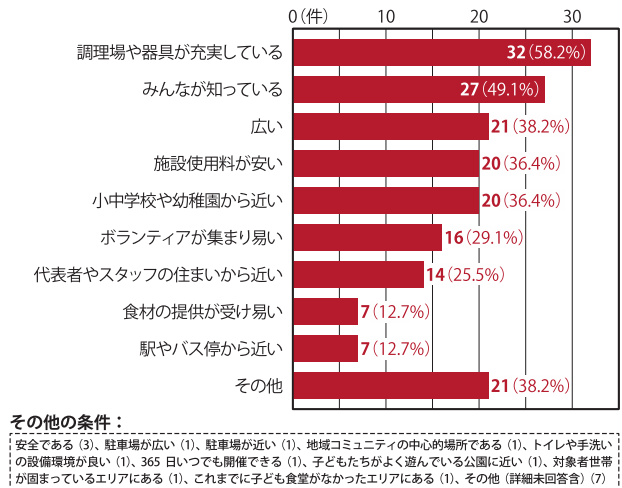


図 6 子ども食堂の開催場所

2-4. 食事以外の取り組み

子ども食堂における食事以外の取り組みについて整理したものを図 7 に示す。約 75% の子ども食堂が食事の提供以外の取り組みを行っており、その種類は 30 以上にのぼる。

学習支援や食育等の学びに関する取り組みや、季節行事等のレクリエーションといった子どもを対象とした活動が多いが、子育て等の悩み相談対応や料理教室、保護者同士の座談会といった保護者も含めて対象とした活動や、高齢者受入、食材提供等の地域スケールにわたる諸支援等、地域に開いた多様な取り組みを展開していることが分かる。

2-5. 広報の方法及び他主体の連携

子ども食堂の開催等における広報の方法をみると、多くは「チラシ等の配布」によるものが中心であった（図 8）。他主体との連絡関係については、「地域の社会福祉協議会」と「地域の小中学校」以外との関係を有する例は半数を下回る結果であった（図 9）。



図7 子ども食堂における食事以外の取り組み

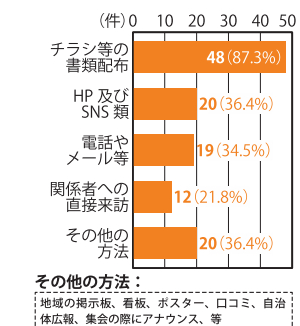


図8 子ども食堂の広報の方法

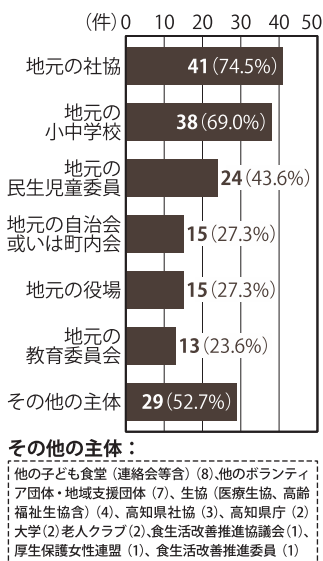


図9 他主体との連絡関係

3. Before 期における子ども食堂の食材調達と献立の方針

3-1. 品目別にみる食材の調達方法と需要

子ども食堂で使用される食材の調達状況について、「米」「パン」「めん類」「粉物・穀物」「生鮮野菜」「野菜加工品」「生鮮肉」「肉加工品」「鮮魚類」「魚加工品」「冷凍食品・インスタント食品」「牛乳・乳製品」「油・調味料」「卵」「お菓子・デザート・スイーツ類」「惣菜おかず」「弁当類」「お茶・コーヒー・ココア類」「その他の飲料」の18品目別^{注3)}に、それぞれ5段階評価で調達方法 (5: 全て購入している、4: 寄付も受けているが購入の割合の方が高い、3: 寄付と購入は同じくらいの割合、2: 購入もしているが寄付の割合の方が高い、1: 全て寄付を受けている) 及び使用頻度 (5: 毎回必ず使う、4: よく使う、3: ときどき使う、2: ほとんど使わない、1: 全く使わない) を把握し、表2及び3に整理した。以下、品目別の傾向について述べる。

【米】ほぼ全ての子ども食堂で「毎回必ず使う」食材、需要は高いが寄付も多い【パン】半数近くで「全く使わない」が、使っているところは多くが購入による調達【めん類】使用頻度は低くないが過半数が購入を含む調達【粉物・穀物】使用頻度はやや高い、過半数が購入を含む調達【生鮮野菜】ほぼ全てで「毎回必ず使う」食材、寄付も多いが「全て寄付」は1例のみ【野菜加工品】使用頻度は低いが過半数が購入を含む調達【生鮮肉】使用頻度は高いが寄付による調達

の例は極めて少ない【肉加工品】使用頻度はばらつきがあるが過半数が購入を含む調達【鮮魚類】多くで「全く使わない」食材であるが潜在的需要の可能性は未知数【魚加工品】使用頻度は低いが過半数が購入を含む調達【冷凍食品・インスタント食品】過半数で「全く使わない」が使用頻度はばらつき有【牛乳・乳製品】使用頻度は低くないが過半数が「全て購入」であり寄付は少ない【油・調味料】ほぼ全てで「毎回必ず使う」が寄付による調達は極めて少ない【卵】

使用頻度はばらつきがあるが概ね高い傾向、「全て寄付」の例も少ないが存在【お菓子・デザート・スイーツ類】使用頻度はばらつきがあるが概ね高い傾向【惣菜おかず・お弁当類】ほとんどの子ども食堂で「全く使っていない」【お茶・コーヒー・ココア類】需要は極めて高いが寄付による調達の例はごく少数【その他の飲料】多くの子ども食堂では「全く使わない」が一定の需要は存在。

表2 食材の調達方法と使用頻度 (1) 米、パン、めん類、粉物・穀物、生鮮野菜、野菜加工品、生鮮肉、肉加工品、鮮魚類、魚加工品、冷凍食品・インスタント食品、牛乳・乳製品

米	全て購入	購入の割合が多い	購入と寄付は同程度の割合	購入と寄付は同程度の割合	購入の方が多	購入もしているが	全て寄付	無回答	合計
毎回必ず使う	6	7	4	15	16	0	0	0	48
よく使う	2	0	0	2	1	0	0	0	5
ときどき使う	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ほとんど使わない	0	0	0	0	0	0	0	0	0
全く使わない	0	0	0	0	0	0	0	0	0
無回答/その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	8	7	4	17	17	0	0	0	53

パン	全て購入	購入の割合が多い	購入と寄付は同程度の割合	購入と寄付は同程度の割合	購入の方が多	購入もしているが	全て寄付	無回答	合計
毎回必ず使う	1	0	0	0	0	0	0	0	1
よく使う	0	1	0	0	0	1	0	0	2
ときどき使う	5	1	1	1	1	0	0	0	9
ほとんど使わない	11	2	0	1	3	0	0	0	17
全く使わない	0	0	0	0	0	23	23	0	23
無回答/その他	0	0	0	0	0	0	1	1	1
合計	17	4	1	2	5	24	53	0	53

めん類	全て購入	購入の割合が多い	購入と寄付は同程度の割合	購入と寄付は同程度の割合	購入の方が多	購入もしているが	全て寄付	無回答	合計
毎回必ず使う	0	0	0	0	0	0	0	0	0
よく使う	5	0	0	0	0	0	0	0	5
ときどき使う	12	10	1	7	4	0	0	0	34
ほとんど使わない	5	3	1	1	0	0	0	0	10
全く使わない	0	0	0	0	0	0	4	4	4
無回答/その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	22	13	2	8	4	4	53	0	53

粉物・穀物	全て購入	購入の割合が多い	購入と寄付は同程度の割合	購入と寄付は同程度の割合	購入の方が多	購入もしているが	全て寄付	無回答	合計
毎回必ず使う	7	2	0	1	0	0	0	0	10
よく使う	6	6	1	0	0	0	0	0	13
ときどき使う	13	3	2	1	0	0	0	0	19
ほとんど使わない	7	0	0	0	1	0	0	0	8
全く使わない	0	0	0	0	0	3	3	0	3
無回答/その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	33	11	3	2	1	3	53	0	53

生鮮野菜	全て購入	購入の割合が多い	購入と寄付は同程度の割合	購入と寄付は同程度の割合	購入の方が多	購入もしているが	全て寄付	無回答	合計
毎回必ず使う	1	10	12	19	1	0	0	0	43
よく使う	2	3	0	2	0	0	0	0	7
ときどき使う	0	0	1	1	0	0	0	0	2
ほとんど使わない	0	0	0	0	0	0	0	0	0
全く使わない	0	0	0	0	0	1	1	0	1
無回答/その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	3	13	13	22	1	1	53	0	53

野菜加工品	全て購入	購入の割合が多い	購入と寄付は同程度の割合	購入と寄付は同程度の割合	購入の方が多	購入もしているが	全て寄付	無回答	合計
毎回必ず使う	2	4	2	2	0	0	0	0	10
よく使う	2	0	0	2	0	0	0	0	4
ときどき使う	6	4	0	2	0	0	0	0	12
ほとんど使わない	12	1	0	5	2	0	0	0	20
全く使わない	0	0	0	0	0	5	5	0	5
無回答/その他	0	0	0	0	0	2	2	0	2
合計	22	9	2	11	2	7	53	0	53

生鮮肉	全て購入	購入の割合が多い	購入と寄付は同程度の割合	購入と寄付は同程度の割合	購入の方が多	購入もしているが	全て寄付	無回答	合計
毎回必ず使う	22	2	2	0	0	0	0	0	26
よく使う	14	1	0	2	0	0	0	0	17
ときどき使う	2	2	0	0	0	0	0	0	4
ほとんど使わない	1	0	0	2	0	0	0	0	3
全く使わない	0	0	0	0	0	3	3	0	3
無回答/その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	39	5	2	4	0	3	53	0	53

肉加工品	全て購入	購入の割合が多い	購入と寄付は同程度の割合	購入と寄付は同程度の割合	購入の方が多	購入もしているが	全て寄付	無回答	合計
毎回必ず使う	5	2	1	0	0	0	0	0	8
よく使う	7	1	1	2	1	0	0	0	12
ときどき使う	8	5	0	2	0	0	0	0	15
ほとんど使わない	9	1	0	0	1	0	0	0	11
全く使わない	0	0	0	0	0	6	6	0	6
無回答/その他	0	0	0	0	0	1	1	0	1
合計	29	9	2	4	2	7	53	0	53

鮮魚類	全て購入	購入の割合が多い	購入と寄付は同程度の割合	購入と寄付は同程度の割合	購入の方が多	購入もしているが	全て寄付	無回答	合計
毎回必ず使う	0	1	0	1	0	0	0	0	2
よく使う	4	0	0	1	1	0	0	0	6
ときどき使う	5	3	1	0	1	0	0	0	10
ほとんど使わない	5	2	0	2	3	0	0	0	12
全く使わない	0	0	0	0	0	22	22	0	22
無回答/その他	0	0	0	0	0	1	1	0	1
合計	14	6	1	4	5	23	53	0	53

魚加工品	全て購入	購入の割合が多い	購入と寄付は同程度の割合	購入と寄付は同程度の割合	購入の方が多	購入もしているが	全て寄付	無回答	合計
毎回必ず使う	5	0	0	1	0	0	0	0	6
よく使う	5	1	1	1	0	0	0	0	8
ときどき使う	6	6	3	0	0	0	0	0	15
ほとんど使わない	15	0	0	1	1	0	0	0	17
全く使わない	0	0	0	0	0	7	7	0	7
無回答/その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	31	7	4	3	1	7	53	0	53

冷凍食品・インスタント食品	全て購入	購入の割合が多い	購入と寄付は同程度の割合	購入と寄付は同程度の割合	購入の方が多	購入もしているが	全て寄付	無回答	合計
毎回必ず使う	1	0	0	0	2	0	0	0	3
よく使う	0	1	0	2	1	0	0	0	4
ときどき使う	10	3	0	1	1	0	0	0	15
ほとんど使わない	4	1	1	2	3	1	0	0	12
全く使わない	0	0	0	0	0	19	19	0	19
無回答/その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	15	5	1	5	7	20	53	0	53

牛乳・乳製品	全て購入	購入の割合が多い	購入と寄付は同程度の割合	購入と寄付は同程度の割合	購入の方が多	購入もしているが	全て寄付	無回答	合計
毎回必ず使う	0	0	1	0	0	0	0	0	1
よく使う	4	1	0	1	0	0	0	0	6
ときどき使う	22	0	0	1	0	0	0	0	23
ほとんど使わない	12	0	0	2	1	0	0	0	15
全く使わない	0	0	0	0	0	8	8	0	8
無回答/その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	38	1	1	4	1	8	53	0	53

表3 食材の調達方法と使用頻度(2) 油・調味料、卵、お菓子・デザート・スイーツ類、惣菜おかず・お弁当類、お茶・コーヒー・ココア類、その他の飲料

油・調味料	購入及び寄付の割合					無回答	合計
	全て購入	購入も受けているが同じくらい	購入も受けているが寄付の方が多い	購入もしているが寄付の方が多い	全て寄付		
毎回必ず使う	25	16	3	2	0	0	46
よく使う	5	0	0	1	0	0	6
ときどき使う	0	0	0	0	0	0	0
ほとんど使わない	1	0	0	0	0	0	1
全く使わない	0	0	0	0	0	0	0
無回答/その他	0	0	0	0	0	0	0
合計	31	16	3	3	0	0	53

卵	購入及び寄付の割合					無回答	合計
	全て購入	購入も受けているが同じくらい	購入も受けているが寄付の方が多い	購入もしているが寄付の方が多い	全て寄付		
毎回必ず使う	14	1	0	1	5	0	21
よく使う	13	1	0	1	0	0	15
ときどき使う	11	0	0	0	0	0	11
ほとんど使わない	1	0	0	0	0	0	1
全く使わない	0	0	0	0	0	2	2
無回答/その他	0	0	0	0	0	0	0
合計	39	2	0	2	5	2	50

お菓子・デザート・スイーツ類	購入及び寄付の割合					無回答	合計
	全て購入	購入も受けているが同じくらい	購入も受けているが寄付の方が多い	購入もしているが寄付の方が多い	全て寄付		
毎回必ず使う	4	4	1	1	1	1	12
よく使う	3	5	0	5	1	0	14
ときどき使う	8	4	3	2	3	0	20
ほとんど使わない	2	0	2	0	1	0	5
全く使わない	0	0	0	0	0	2	2
無回答/その他	0	0	0	0	0	0	0
合計	17	13	6	8	6	3	53

惣菜おかず・お弁当類	購入及び寄付の割合					無回答	合計
	全て購入	購入も受けているが同じくらい	購入も受けているが寄付の方が多い	購入もしているが寄付の方が多い	全て寄付		
毎回必ず使う	5	0	0	0	0	0	5
よく使う	0	0	0	0	0	0	0
ときどき使う	0	0	0	0	0	0	0
ほとんど使わない	2	0	0	1	0	3	3
全く使わない	0	0	0	0	44	44	44
無回答/その他	0	0	0	0	1	1	1
合計	7	0	0	0	1	45	53

お茶・コーヒー・ココア類	購入及び寄付の割合					無回答	合計
	全て購入	購入も受けているが同じくらい	購入も受けているが寄付の方が多い	購入もしているが寄付の方が多い	全て寄付		
毎回必ず使う	31	3	2	3	1	0	40
よく使う	1	0	2	0	0	0	3
ときどき使う	3	2	0	0	0	0	5
ほとんど使わない	1	0	0	0	0	0	1
全く使わない	0	0	0	0	0	4	4
無回答/その他	0	0	0	0	0	0	0
合計	36	5	4	3	1	4	53

その他の飲料	購入及び寄付の割合					無回答	合計
	全て購入	購入も受けているが同じくらい	購入も受けているが寄付の方が多い	購入もしているが寄付の方が多い	全て寄付		
毎回必ず使う	3	1	0	0	0	0	4
よく使う	1	0	0	0	0	0	1
ときどき使う	4	1	1	1	0	0	7
ほとんど使わない	4	1	0	2	1	0	8
全く使わない	0	0	0	0	30	30	30
無回答/その他	0	0	0	0	0	3	3
合計	12	3	1	3	1	33	53

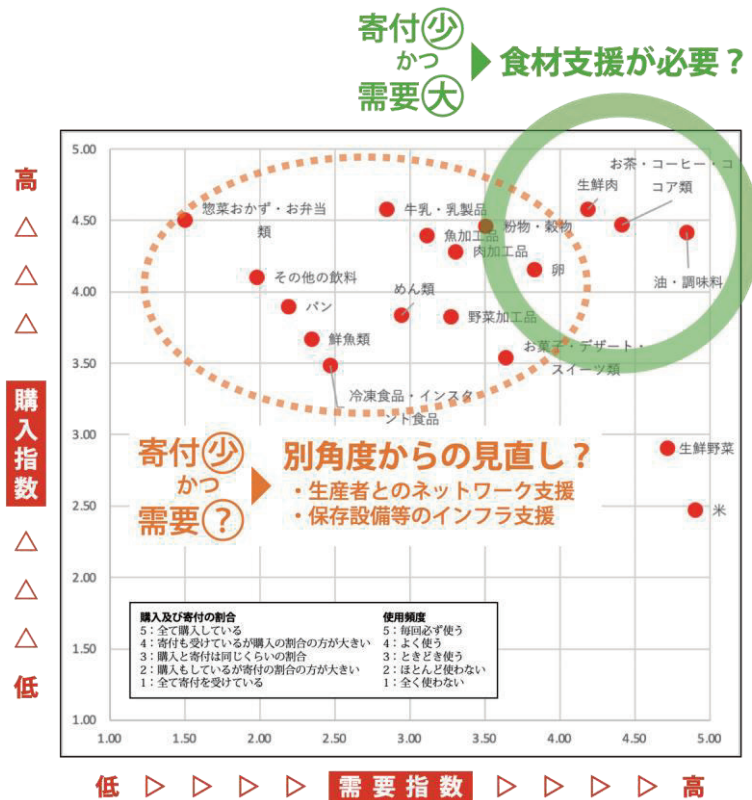


図10 食材の調達方法と使用頻度の品目別比較

以上の品目別に、調達方法及び使用頻度の平均値をプロットしたものが図10である。分布をみると「油・調味料」「お茶・コーヒー・ココア類」「生鮮肉」「卵」「粉物・穀物」が使用頻度、自費購入割合共に高く、何らかの食材支援が有

効であると考えられるが、一方でそれ以外の食材については、使用頻度≒需要と決めつけるのではなく、5章にて詳述する生産者とのネットワーク支援や、保存設備等のインフラ支援について検討することも必要であると考えられる。

3-2. 方針別にみる献立の実践割合と重要度

子ども食堂の献立について、「子どもに人気のある献立」「材料費等のコストがかかり過ぎない献立」「国産や無農薬等、食の安全に配慮した献立」「地域の名産物や伝統食を含む献立」「栄養バランスの整った献立」「家でも簡単に作ることのできる献立」の6方針別に、5段階評価での重要性（5：かなり重要だと思う、4：やや重要だと思う、3：どちらともいえない、2：あまり重要と思わない、1：殆ど重要と思わない）及び実践の有無を把握した（表4、5）。「子どもに人気のある献立」「材料費等のコストがかかり過ぎない献立」が実践されている傾向にある一方、その重要性については、ほぼ全ての方針で重要だと認識されていることが分かる。

表4 献立の方針別の実践割合

	実践している	していない (実践は難しい)	無回答	計	実践している割合
子どもに人気のある献立	46	7	0	53	86.8%
材料費等のコストがかかり過ぎない献立	46	7	0	53	86.8%
国産や無農薬等、食の安全に配慮した献立	26	26	1	53	49.1%
地域の名産物や伝統食を含む献立	29	23	1	53	54.7%
栄養バランスの整った献立	44	9	0	53	83.0%
家でも簡単に作ることのできる献立	37	16	0	53	69.8%

表5 献立の方針別の重要度

	かなり重要と思う	やや重要と思う	どちらともいえない	あまり重要と思わない	ほとんど重要と思わない	無回答	計	平均値	実践している割合
子どもに人気のある献立	19	25	6	2	1	0	53	4.11	86.8%
材料費等のコストがかかり過ぎない献立	27	23	3	0	0	0	53	4.45	86.8%
国産や無農薬等、食の安全に配慮した献立	22	21	9	1	0	0	53	4.21	49.1%
地域の名産物や伝統食を含む献立	12	24	12	5	0	0	53	3.81	54.7%
栄養バランスの整った献立	35	14	3	1	0	0	53	4.57	83.0%
家でも簡単に作ることのできる献立	10	23	15	5	0	0	53	3.72	69.8%

次に、献立の各方針について、実践割合と重要度それぞれの平均値をプロットしたものが図11である。分布をみると、重要との認識と実践割合とが共に高い項目として「子どもに人気のある献立」「材料費等のコストがかかり過ぎない献立」「栄養バランスの整った献立」の3つが挙げられている。残る3項目「国産や無農薬等、食の安全に配慮した献立」「地域の名産物や伝統食を含む献立」「家でも簡単に作ることのできる献立」も重要との認識は高く、今後充実させるべき点として留意する必要がある。

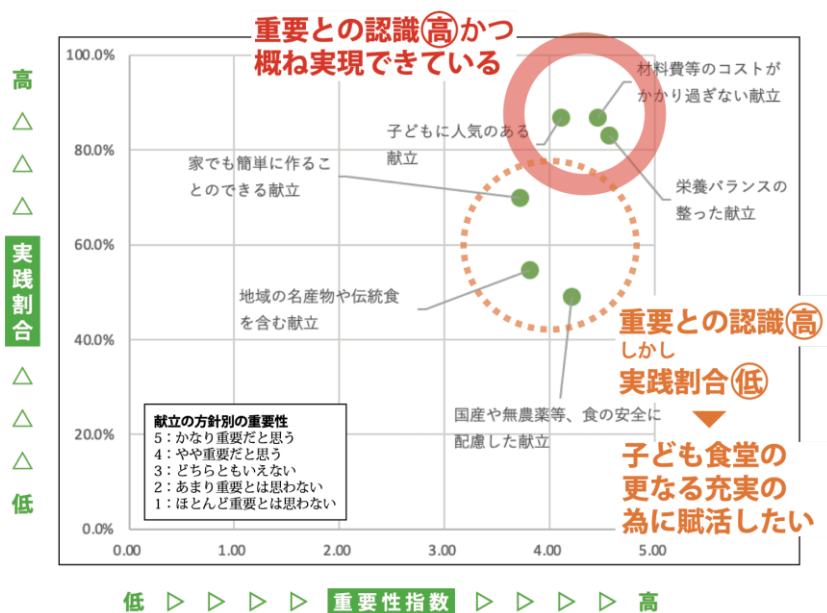


図11 献立の方針別の重要性と実践割合

4. With期における子ども食堂の動向

4-1. COVID-19による悪影響の有無と程度

With期（2020年2月～2021年11月）においてCOVID-19が子ども食堂に及ぼした悪影響について、それぞれの項目に対して5段階評価（5：とてもそうだと思う、4：ややそうだと思う、3：どちらともいえない、2：あまりそう思わない、1：殆どそう思わない）に基づき整理した（図12）。「食事の提供方法が難しくなった」

が最も多く、続いて「参加者（子ども）の様子を知ること」「広報や集客」「スタッフのモチベーションの維持」が難しくなったことが挙げられている。一方で開催場所や備品、食材の確保への影響は殆どみられなかった。

4-2. COVID-19による悪影響の有無と程度

With期における子ども食堂の実施状況を見ると（図13）、期間中も常に半数以上の子ども食

堂が何らかの取り組み（テイクアウト方式での実施、食材提供のみ、代替イベントの実施等）を継続的に実施していたことが分かる。期間中一度も取り組みを実施できなかった子ども食堂は3件であった。

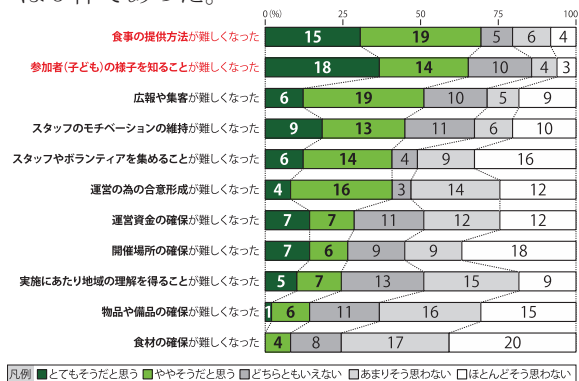


図 12 COVID-19 による悪影響の有無と程度

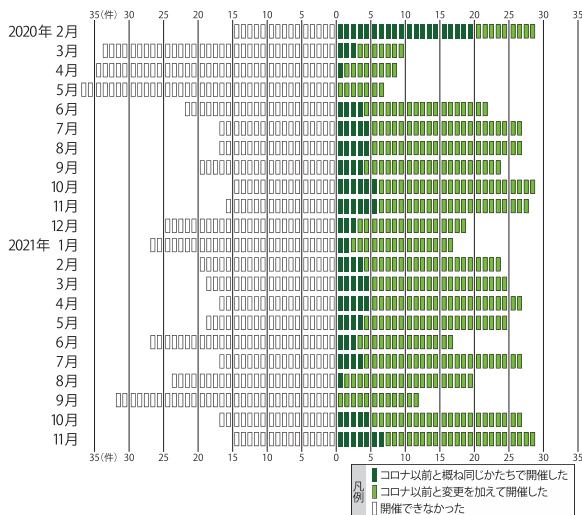


図 13 With 期 (2020.02~2021.11) における子ども食堂の実施状況

4-3. 今後の改善点や新たな取り組みへの意向

With 期を通して感じた改善点や新たな取り組みへの意向について整理したものを図 14 に示す。新たな取り組みへの意欲が既存の取り組みの改善を上回る結果であった。その具体例(図 15)と併せてみると、三密回避が徹底される中で「(多世代が)集まること」「コミュニケーションを取ること」の重要性とその実現に向けた課題への認識が強くなったことが推察される。

COVID-19 感染拡大対策に伴い、食事の提供方法の抜本的な変更が余儀なくされると共に、例えば子どもの機微に触れる等の「集まって食事を摂る」ことの副次的効果をも奪われるかたちとなった。一方で多くの子ども食堂では不断の努力により取り組みを継続しており、逆説的に子ども食堂の可能性が顕在化される中で、新た

な活動や目標を見出す契機にもなったのではないかと推察される。

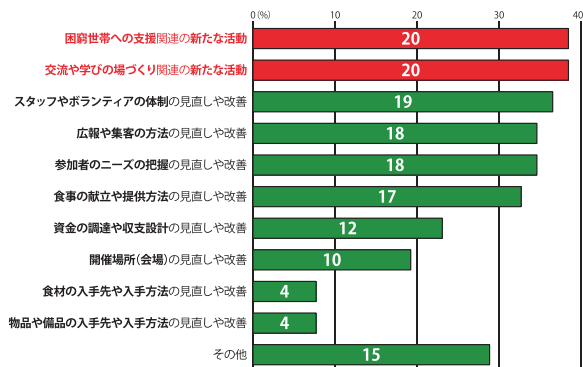


図 14 With 期を通して改善が必要な点及び必要だと感じた新たな活動

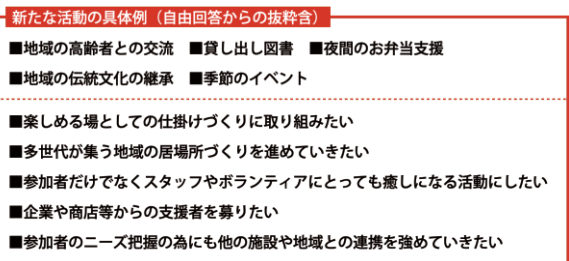


図 15 新たな活動の具体例

5. 今後の子ども食堂の推進及び支援を考える上での4つの論点

前章までの Before 期・With 期における実態把握を踏まえ、アンケート調査の自由回答及びヒアリング調査の整理から After COVID-19 に向けた子ども食堂の推進及び支援を考える上での論点を以下の4点に整理した(図 16、17)。

5-1. 子ども食堂の拡張と原点回帰

With 期において同じ食卓を囲む形式から弁当を配布するテイクアウト形式(写真 1、2)へと食事の提供方法の変更が余儀なくされた中で、多世代の交流を促す居場所としての役割や、食事以外の取り組みの重要性を指摘するコメントが挙げられており、子ども食堂の多面的意義への認識が逆説的に強まっている。一方でテイクアウト形式による利用者層の変化や、子どもの様子を知ることが困難になったことで、子ども食堂の本来の意義が薄まることへの危惧も多く挙げられている。

子ども以外の年齢層も対象とした地域の居場所としての多様化・多機能化(写真 3)と、「子どもの貧困への対応」という本質的役割との乖離をどのように考えるのか、子ども食堂それぞれのリソースやキャパシティに応じた方向付けの是非も踏まえた議論が必要である。

論点1. 子ども食堂の拡張と原点回帰

#子ども食堂の多様性
#リソースやキャパシティに応じた方向付けを
#地域内の他主体との連携（後述）

- ▶ COVID-19を経て強まる多面的意義（食事+α）への認識
- ▶ 一方で本来の目的が薄れることへの危惧も有

第2回アンケート自由回答より：

- * 正直、食事の提供の場所づくりにかなりハードルを感じる。しかしそれ以上にこんな状況だからこそ、コミュニケーションのとれる居場所が子どもだけでなく子どもを守る大人達にも必要だと強く感じている。
- * 民生児童委員の活動も少なく、また、PTAの活動も少なくなり、地域の輪や交流がコロナでさらになくなりつつあります。
- * 地元小学校を会場としてのスタートだったため、利用者を小学生、その保護者、卒業生、教職員と絞っている。そのまま継続していったらいいのか最近考える事が多くなった。ただ広めるとスタッフ合意が難しい。
- * テイクアウト方式にしてから、子どもの声や家族の声を聞く時間がなくなり、本当に必要な人に支援ができていないかが分からない。
- * 誰でも使える子ども食堂はこれからも続けていきたいが、その中でも本当に困っている困窮者とどうつながっていくかを改めて考えていきたいと思います。
- * コロナ前は子供がふらっと来て遊んで交流して食べていける居場所となっていたが、お弁当、予約、形式が長く続いているため、本来の子どもの居場所にはなっていない。家族のつながりやスタッフとの交流、地域の高齢者の参加など積極面もある。本当に必要な人に届いているか。疑問であるが続けていくことによって届いていくのではと考えている。

論点2. 子ども食堂への適切な支援の在り方

#公的制度=規制と緩和
#制度と当事者の間に立つのが公
#制度を共に「攻略する」姿勢

- ▶ 財的・物的支援の規模や用途の拡張、適切な動線づくり
- ▶ 情報共有の質量担保、ネットワーク基盤の更なる強化

第2回アンケート自由回答より：

- * こども食堂は共に食事をして時間を共有することで多世代の交流の場となっています。…（中略）… 増々充実した活動にする為には、現在の補助金だけでは十分ではありません。
- * 食事だけではない子ども食堂が出来る制度や支援をお願いしたい。
- * 公的支援は大変ありがたいです。ただ使い道と使い方に色々指定や制限があり、心が萎えてきてやりくりが重荷になります。
- * 県補助金が一律というのは検討できないでしょうか。参加人数等で金額を設定していただけるとありがたいのではと思います。
- * 開催場所にはクーラーは設置されていますが、エアコンは無く寒い中で行っています。お願い出来ればご支援下さい。
- * 冷蔵庫の設置をしてほしい。現状はスタッフの各家庭に（食材等の）保管をお願いしています。
- * スタッフも少しは社会に役立っていると思って、生きがいにもなっています。体が動くかぎり手伝う人は多いです。スタッフの車代くらい出してもらえそうな運営ができればと思います。
- * コロナ以降は…（中略）…大学生や生活困窮の方に向けて食材の支援等困っている方々に支援しています。生活支援も重要になっているので支援物資の情報も各子ども食堂等に知らせて欲しいです。

図 16 今後の子ども食堂の推進及び支援を考える上での4つの論点（1）

論点3. 子ども食堂の多様な連携・共生のかたち #シェアリングエコノミーの発想 #積極的なマッチングが必要 #必要に応じた規制緩和も

- ▶ 子ども食堂の支援 (Active) / 子ども食堂が支援 (Passive)
- ▶ 子ども食堂を支えてきた技術やノウハウの棚卸と転用
- ▶ 有形無形の余剰や余白を補い合う仕組みや体制づくり
- ▶ コーディネーターの必要性 (一方で円滑な連携を妨げるリスクも有)

第2回アンケート自由回答より：

- * 事業のネットワーク化が進んでいない。現在隔月で市社協、コミュニティナース（病院）との会議を新設しました。
- * こども食堂を多くの人に知ってもらう為の広報活動を広げ、企業や商店や他人の支援者を募りたいと思います。
- * 今は会場を借りてその時だけ使用するので、常時利用出来たら活動が広がり深まると思います。空家などを利用できたら良いかと思います。
- * 他の施設や地域との連携が取れていないので、社協さんに間にいらしていただいて交流していきたいと思っています。

論点4. 当事者(子ども以外も含む)の立ち位置 #あらゆる社会問題に共通 #場づくりから価値観づくりへ #地域共生社会の本質

- ▶ 子どもを助ける場から、子どもが学ぶ場・活躍する場へ
- ▶ 運営者／参加者がシームレスに繋がる価値観づくり
- ▶ 「当たり前にあった地域社会」文化の再形成

第2回アンケート自由回答より：

- * 現在行っている学習支援、イベントの内容などの充実をはかり交流を深めてこども食堂に参加する人(ボランティアも含め)すべての人の学びや癒しの場になるように努めます。
- * 利用者の人数が多く、なかなかもう一步踏み込んだ活動とは言えないところもあるが、地域の居場所にはなれているのではと自負している。
- * 食事の提供も大切だが、異世代の交流の重要性、新しい居場所がコロナで発生した状況をみて強く感じた。つながっている事を感じれる場所は必要なので再構築したい。
- * 自分の子ども食堂では、子ども(中学生)が食事をつくって地域の人達に提供しているが、次の世代につながるように、子どもボランティアの確保をしていくのが課題となっている。
- * 子ども食堂に限らず、誰もが気軽にボランティアに参加して相互に助け合うことが当たり前の社会になれば良い。
- * まだまだ市や市社協の動きがみられない。弱者を含め誰もが住みよい町づくりを求める(その1つの方法に子ども食堂があれば)。

図 17 今後の子ども食堂の推進及び支援を考える上での4つの論点 (2)



お弁当のテイクアウト方式にしてから高齢者の利用が多くなったように感じます。利用者層の変化は感じますが、基本的に拒否はしません。…(中略)…お弁当は食事の量の管理がし易く、撤収も早いので、今のスタッフの規模だとバイキング形式に戻すのは難しいかもしれません。(ヒアリング調査より)

写真1 テイクアウトによる食事提供(南国市)



写真2 キッチンスペースのみを使用するテイクアウト形式の子ども食堂(高知市)



写真3 子ども食堂に併設して開催されたバザー(南国市)

5-2. 子ども食堂への適切な公的支援の在り方

多くの子ども食堂で、運営の為の財源が充分ではないとする意向がみられた。とりわけ食材や備品の保管場所の確保が困難とするコメント

が挙げられており、大人数分の生鮮食材を冷凍、冷蔵により長期間保存する為の支援が必要とされている。こうした傾向は、3章で述べた食材の調達方法や使用頻度、献立の方針等にも影響するものと考えられる為、こうしたニーズに応える為の財的、物的、人的支援の規模や使徒の拡張、適切な動線づくりが必要であると考えられる。

5-3. 子ども食堂の多様な連携・共生のかたち

子ども食堂の運営に係る技術やノウハウの伝達、開催場所や食材の保管場所等のリソース共有、或いは広報活動といった点において、子ども食堂同士のネットワーク形成や、他主体との連携を望むとする意向は多く挙げられている。

一方でこうした「子ども食堂を支援する」為の連携のみならず、子ども食堂が小学校の食育に協力している事例等の「子ども食堂が支援する」かたちを積極的に模索していくことも重要である。こうした連携の実現に向けては、コーディネーターとなる第三者の設置や、プラットフォームの整備等を検討していく必要がある。

5-4. 子ども以外も含めた当事者の立ち位置

一部の子ども食堂では、中高生や大学生のボランティアや、利用者である子ども自身が調理や配膳に協力することを積極的に促進、推奨している(写真4、5)。このように、子どもを単なる支援の対象とするのではなく、子ども自身が学び、活躍する場として子ども食堂を位置付け、運営者と参加者とをシームレスに繋げていくスタンスは、今後の地域共生社会の実現に向けた視点としても重要であると考えられる。



利用者だった中学生が今はボランティアとして協力してくれています。そうした世代交代が続けば良いのですが、担い手不足なのが現状です。無償ではなく、例えば少額でもきちんと対価をお支払いできれば良いのですが、今の状態では難しいですね。(ヒアリング調査より)

写真4 中学生ボランティアの参画(黒潮町)



写真5 大学生ボランティアの参画（高知市）

一方で多くの子ども食堂はスタッフの不足を問題として挙げており、今後は青少年層を含めた担い手の拡充についての仕組みづくりが急務である。

6. 結論

6-1. 研究のまとめ

本研究で明らかになったことは以下の通りである。

6-1-1. Before COVID-19 における子ども食堂の運営実態

高知県における子ども食堂は過半数がスタッフ6～10名、参加者50名以下の運営規模であり、概ね水・木の夕食時間帯或いは土・日の昼食時間帯で開催されていた。多くの子ども食堂が食事以外の活動を並行しており、多世代の集う場として機能していることが窺える。食材の調達や献立の方針には一定の傾向がみられ、今後の子ども食堂の充実に向けたフォローも必要である（2・3章）。

6-1-2. With COVID-19 における子ども食堂の運営実態

With 期においても殆どの子ども食堂が何らかの取り組みを継続していた。今後の展望については食事提供以外の新たな取り組みへの意向が強く、子ども食堂の多面的意義への認識が強まっていることが推察される（4章）。

6-1-3. After COVID-19 に向けた子ども食堂の今日的課題

各章のまとめ及びアンケート調査の自由回答、ヒアリング調査の整理より、子ども食堂の①拡張と原点回帰、②適切な公的支援の在り方、③多様な連携・共生のかたち、④子ども以外も含む当事者の立ち位置の4点が課題として整理さ

れた（5章）。

6-2. 今後の課題

本研究ではCOVID-19を通した子ども食堂の大局的な傾向を把握するのみに留まり、当初想定していた子ども食堂の企画運営を通したアクションリサーチの実施には至らなかった。

本研究で得られた4つの論点を踏まえ、1) 継続的なヒアリング調査等による子ども食堂の更なる詳細把握、2) 企画運営の実施を通して、子ども食堂の多様化の様相をより高い解像度で把握すると共に、子ども食堂の更なる推進と支援に向けた提言を行うことを今後の研究課題としたい。

謝辞

本研究の実施にあたり御協力頂いた高知県ボランティア・NPOセンターの皆様、マツダ財団関係者の皆様に感謝の意を表します。そして高知県内で子ども食堂の運営に携わる全ての皆様に感謝と敬意を申し上げます。

発表論文等

- 1) 野田満：（基調講演）高知における子ども食堂の可能性と課題、地域共生社会の実現に向けた子ども食堂シンポジウム（高知県高知市）、2022.09

※以下より記録動画を閲覧可能（高知県ボランティア・NPOセンターYoutubeチャンネル）



第1部 基調講演



第2部 パネルディスカッション

- 2) 野田満：高知県における子ども食堂の実態とAfter COVID-19 に向けた今日的課題、日本建築学会関東支部優秀研究報告集、2023.02

浦注

- 注1) 参考文献1参照。
- 注2) 本研究では便宜上、概ね2020年2月以前を「Before COVID-19 (Before 期)」、同年2月以降を「With COVID-19 (With 期)」、COVID-19による種々の制約が解消された将来を「After COVID-19」と位置付けることとし、以降の考察に用いる。
- 注3) 食材の品目の分類については参考文献2、

3等を参考にした。

参考文献

- 文1) 厚生労働省、<https://www.mhlw.go.jp>
(2022.12 最終閲覧)
- 文2) 藤山浩 (2015) : 田園回帰1%戦略 地元の人
と仕事を取り戻す、農山漁村文化協会
- 文3) 有田昭一郎ほか (2012) : 島根県中山間地域
に居住する子育て世帯の家計支出構造の特
徴と効果的な支援方策に関する研究 (Ⅱ)、
島根県中山間地域研究センター研究報告
No. 8、pp. 1-18